

## 合意目標設定により満足感の向上に繋がった症例 ～患者立脚型評価Hand20を活用した介入～

施設名：中洲八木病院

発表者：尾崎 聖渚 (作業療法士)

共同演者：井上 貴史 (理学療法士)

松本 佳久 (作業療法士)

井関 博文 (理学療法士)

倉田 浩充 (医師)

【はじめに】両側橈骨遠位端骨折後、日常生活動作(以下:ADL)は安定したが「時々使いづらいし、気になる」と使用に対する満足感の低い外来リハビリテーション(以下:リハビリ)へ通院している症例に対して個々のADLや心理面等の課題を詳細に抽出する事ができるHand20を実施。Hand20を用い課題を抽出し、合意目標の再設定を行った事により満足感の向上に繋がった結果を以下に報告する。

【症例】70歳代。女性。X年Y月、卓球中に両手を付く様に後方へ転倒。翌日、当院受診し両前腕ギプス固定にて入院。退院後Y+2カ月より週3回 40分の外来リハビリ通院開始。左手関節の可動域制限が強く本人の希望もあり左手関節を中心にリハビリを実施。受傷前は、独居で趣味の卓球や家庭菜園を行いながら毎日ウォーキングを行う等活動的に生活を送られていた。

【評価】Y+9カ月。左手関節可動域 掌屈60° 背屈55° 回内90° 回外70° 橈屈25° 尺屈45° 握力右28.6kg左21.1kg。Hand20、32点。両手で洗顔する、両手の爪を切る、シャツのボタンのかけ外し、蛇口を捻る、タオルをかたく絞る項目で著明に減点。また、評価時の会話の中で卓球中、床に落ちたピン球が拾いにくいと聴取。Hand20や聴取した内容から症例とセラピスト間で左手関節捻り動作時の違和感の軽減と両手での洗顔動作の安定性、卓球での両手関節の耐久性向上、握力、ピンチ力向上を合意目標としリハビリを継続。

【結果】Y+10カ月。左手関節可動域、変化なし。握力右28.4kg左25.8kgへ向上。Hand20、27点。著明な減点項目全てで点数が向上。また、控えていた力仕事等の手関節負担の大きい動作も安定して可能になったと聴取。また、卓球では受傷前同様に長時間のラリー等が行える様になり満足感が向上し、手関節に対するリハビリは終了。自宅でのセルフトレーニングへ移行となった。

【考察】本症例は、リハビリ意欲が高く継続したリハビリを実施していたが明確な目標設定がなかった為にADLや趣味活動での満足感が低下していたと考えられた。橈骨遠位端骨折診療ガイドライン2017では、患者立脚型評価が開発され信頼性や反応性についても検証されており、治療の有用性等に有用な評価方法であると考えられるや患者本人がリハビリの具体的な内容を理解し指導する事は機能回復に有用であり推奨すると述べられている。今回、患者立脚型評価であるHand20を用いた事で現状の詳細な課題を抽出する事ができ症例自身でリハビリの必要性を理解しリハビリを実施した事により点数の改善がみられ満足感の向上へと繋がったと考える。今回の結果をふまえ、患者個々に合わせた詳細な課題の抽出と明確な合意目標の設定がリハビリ意欲や満足感の向上に繋がると示唆された為、今後通院初期よりHand20を活用する事も有用であると考ええる。